

モンゴル国における乳児死亡率減少のための対策シミュレーション～近隣諸国との乳児死亡率比較から見えてきたこと～

新潟医療福祉大学大学院 JICA プログラム・松尾みき
新潟医療福祉大学・古西 勇, 瀧口 徹

【背景】

本研究は新潟医療福祉大学大学院（修士課程）国際保健医療学演習Ⅱの一部である。モンゴル国は中国とロシアに挟まれた北アジアのモンゴル高原に位置し、日本の約4倍の国土を有している。青年海外協力隊の派遣予定地であるモンゴル国の保健・医療・福祉分野の重大な課題を「鳥の眼」で大局的な観察をし、地域に密着した「草の根」の対策で問題解決の糸口を掴むための基礎的シミュレーションを行った。

【方法】

モンゴル国における保健・医療・福祉に関する時系列データを集め、喫緊の課題を抽出、UNICEFの子供白書2014のデータ¹⁾をもとに、現状の医療情勢についての状況を把握し継続的に隣国と比較、問題解決の手法をシミュレーションする。あわせて現在進められているJICAのプロジェクト²⁾と本シミュレーションとの協働効果も検討した。

【結果】

現在モンゴル国の乳児死亡率は日本の約10倍である。しかし1950年から徐々に減少しており、その減少率は隣国とほぼ同様の割合で低下している(図1)。UNICEFの報告によると、現地では出産に関する専門職のかかわりも多く、ワクチン接種率が高い状況にあるにもかかわらず、乳児死亡率が高い状況が確認された。また、下痢をした5歳未満児のうち31%が経口補水塩(ORS)による治療を受けている¹⁾。

【考察】

こうした状況を引き起こす要因として、先行研究から出産と育児の慣習、遊牧という生活スタイルから生じている環境要因に影響を受けていることがわかってきており、出産・育児の慣習、飲用水源や衛生設備の未整備が影響していると考えられた(図2)。現在までODAではインフラ整備を中心に実施され、JICAのプロジェクトでは子供の発達に関する案件の実施がなされている²⁾。専門職による母子教育の内容や文化的な習慣の把握といったフィールドワークとあわせて、出産・育児に関する教育場面への関与も今後重要になってくると考えられる。

以上を踏まえてJICAボランティアによる草の根活動の喫緊の課題を下痢対策に焦点を当て実施することとした。モンゴル国で多くの子供の下痢の原因となっている腸管凝集性大腸菌は、開発途上国の小児の下痢の原因とされる菌であるが、遊牧という生活スタイルの中でどのように汚染が広がっているのかは明らかでない。

ボランティアが行う「草の根」活動の具体的シミュレーション

として、①飲用水の衛生(浄水フィルターの普及や煮沸の必要性)に関する活動。②経口補水塩の作り方や塩の配布。(現地での作成手順と塩の入手方法の確立等)③携帯電話を利用した、症状対処のための遠隔支援システムの構築。以上3つの内容を活動の骨格とし、対象者を妊婦や子どもを持つ母親とした。実施場所は妊婦の検診や出産を行う病院、ワクチン接種を行う保健所などの行政機関を利用する。対象者と地域の特徴を踏まえ、現地スタッフの職種も活かしながら、実施内容を絞り込むこと、必要な経費と資材を現地の地域資源・JICA・WHO・UNICEFへ協力が得られるよう働きかけを行う。この「草の根」活動で下痢対策を強化し、乳児死亡率の減少につなげていけると考察した。

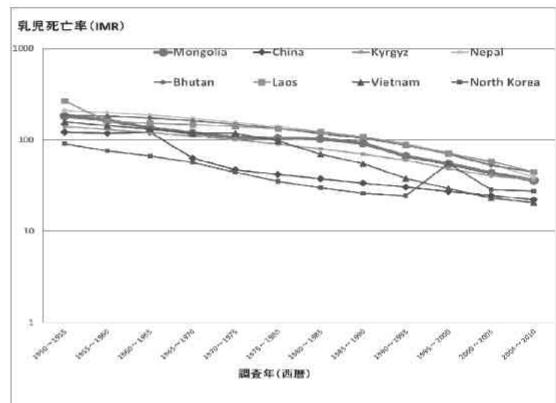


図1 国別乳児死亡率年次推移 対数表示(縦軸対数表示)

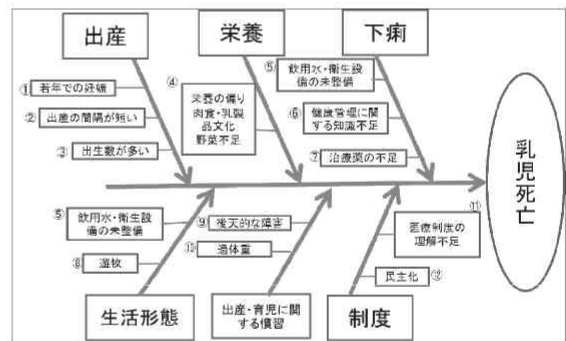


図2 乳児死亡率の特定要因図

【結論】

本研究を通し、「鳥の眼」でみたモンゴルは、広大な大地、遊牧という伝統的で文化的な生活のスタイル、慣習、食生活など多岐に渡って乳児死亡率を上げる要因や土地特有の背景要因があると考えられる。現地の文化や伝統を保ちながらも、健やかな生活を送るための「草の根」活動の検討(シミュレーション)が重要なのではないかと考えられた。

【文献】

- 1) UNICEF:世界子供白書2014 統計編。(オンライン) 入手先 http://www.unicef.or.jp/library/library_wdb14.html
- 2) JICA:事業・プロジェクト。(オンライン) 入手先 <http://www.jica.go.jp/activities/index.html>